

攝待

宮増作

ワキ 武藏坊弁慶

シテヅレ 兼房鷺尾外同行山伏一同

子方 佐藤鶴若

トモ 佐藤従者

シテ 佐藤繼信母

シテヅレ（判官） 源義経

地は 陸奥

季は 雜

「旅の衣は篠懸の。 く。 露けき袖やしをるらん。

歌「子に臥し寅に起き馴れて。 く。 雲井の月を峰の

雪。 其松島に参らんと。 東路さして急ぎけり。

く。

ワキ詞「如何に申し候。 まづ此所に御休みあらうするにて

候。

「承り候。 や。 是に高札の立ちて候ふ御覧候へ。

ワキ「なになに佐藤の館に於て。 山伏摂待と候。 やがて

御着き候へ。

「佐藤の館に於て。 山伏摂待の事は我等が望む所な
れども。 佐藤の館が憚りにて候ふ程に。 御通りあ
れかしと存じ候。

「是は仰せにて候へども。 唯知らぬやうにて御着き

あらうずるにて候。

子「如何に誰がある。

トモ詞「御前に候。

子「山伏達は幾人御着きあるぞ。

トモ「十二人御着きにて候。

子「まづく出でゝ対面申し候ふべし。

ワキ詞「是なる幼き人は誰が御子息にて渡り候ふぞ。

子詞「是は佐藤継信が子にて候。

ワキ「さて継信殿は御内に御座候ふか。

子「判官殿の御供申し。八島の合戦に討たれて候。

ワキ「さて此接待は如何なる人の御企にて候ふぞ。

子「判官殿十二人の山伏となり。奥へ御下りの由承り候ふ程に。祖母にて候ふ者此接待を始めて候。見申せば方々こそ十二人御入り候へ。もし判官殿にては御座なく候ふか。

ワキ「暫く候。かかる疎忽なる事を承り候ふ物かな。まづく御内へ御入り候へ。さればこそ御大事にて候。恐れながら御座を替へられ。皆々の中にうち交り御座候へかしと存じ候。

判官
「実に是は尤にて候。」

シテ
「如何に鶴若。」

子
「何事にて候ふぞ。」

シテ詞
「山伏達は幾人御着き有るぞ。」

子
「十二人御着き候。」

シテ
「かしまし〜。」

一聲
「旧里を出でし鶴の子の。松に帰らぬ淋しさよ。」

サシ
「実にや憚りある身として。御前に参りてさぶらへ

ば。かつうは亡き人の名をも朽たし。又は子供の
いにしへの。恥をも顕はすにてはさぶらへども。
余りに御なつかしき心ばかりにて。御前に参りて
候ふなり。是は故佐藤庄司が後家。繼信忠信が母
にて候。實にや親子恩愛の別れの余りには。包む
べき人目をも知らず。又は憂き身の恥をも。顕は
すにては候へども去りながら。此接待と申すに。
現世の祈の為めにも非ず。後生善所とも思はず。」

嫡子継信は八島にて討たれ。弟忠信は都にて失せ
けるとばかりにて。委しき事をも知らずして。ひ
とり悲しむ身を知る雨の。晴れぬ心や慰むと。此
摂待を始めて候。札を立てゝより此方。一日に五
人三人。乃至一人二人。絶ゆる事はましまさねど
も。十二人は是が始めにて候。いづれか我君ぞ。
何れか其にてましますぞ。夜も更けたり。人の知
るべき事にもあらず。此姥が耳にそと御教へ候は
ば。この摂待の利生にて。

「空しくなりし兄弟を。再び見ると思ふべし。
親子よりも主従は。く。深き契りの中なれば。
さこそ我君も。哀れと思し召すらぬ。殊更御為め
に。命を捨てし郎等の。ひとりは母ひとりは子な
り。などや弔ひの。御言葉をも出だされぬ。かほ
ど数ならぬ。身には思ひの無かれかし。あら恨め
しの憂き世や。く。

下歌地

「是は思ひもよらぬ事を承り候ふ物かな。我等如きの山伏の。五人三人行き連れく通り候ふが。今夜此接待に十二人着きたればとて。判官殿とはかる疎忽なる事を承り候ふ物かな去りながら。繼信忠信の母にてましまさば。判官殿の御内の人名字をば御存じ候ふべし。そなたより名を指して承り候ふべし。

「仰せの如く我子は御内に有りし者なれば。大方は

推量申すとも。さのみはよも違ひ候はじ。

兼房詞「かやうに物申す山伏をば。どこ山伏と御覽じて候ふぞ。

シテ「まづ唯今物仰せられつる客僧は。此御供の内にては一の老体にて御入り候ふな。いで此御供の内に年よりたる人は誰そ。や。今思ひ出だしたり。判

官殿の御めのと。増尾の十郎権の頭。兼房山伏にてましますな。又あれなる山伏はどこ山伏にて御

渡り候ふぞ。

「是は出羽の羽黒山より出でたる客僧にて候。

シテ「いや是は播磨の人の声にて候。それを如何にと申

すに。此姥はもと播磨の者。十三の年繼母を恨み都に上り。故庄司殿と契り。繼信忠信を設け。

今かく憂き目を見候へば。唯恨めしうこそ候へ。されば我国の人の声なれば。などかは知らで候ふべき。いで此御供の内に播磨の人は誰そ。是も思

ひ出だして候。判官殿鶴越とやらんを通り給ひし時。狩人の姿にて参りあひ。其まゝ名字賜はり。

今まで御供と聞えし。鷺尾の十郎山伏にて御渡り候ふな。

ワキ「さてかう申す山伏をば。どこ山伏と知し召されて候ふぞ。

シテ「此御声こそ大事にて候へ。都の人の声かと思へば。又近江の人の声にも似たり。物仰せられ候ふも何

とやらん物々しく見え給ひて候。あつぱれ是は西

塔山伏ごさめれ。それならば本は近江の人。三塔

一の遊僧。今は又我君の。一人当千の武士よなふ。

「武士も。物の哀れは知る物を。などされば余りに。

地御心強くましますぞ。明かさせ給へ人々と。よそ
目も知らず泣き居たり。人目も知らず泣き居た
り。

子詞「かく心もなき人々に。さのみ言葉を尽し給はんよ

り。今は早御内へ御入り候へ。

「暫く候。誠繼信の御子ならば。判官殿とおぼしき
を指し給ひ候へ。

子「承りて候ふとて。十二人の山伏の。皆御顔を見渡
して。是こそ其にておはしませ。

子「いや如何に包ませ給ふとも。人にはれる御粧ひ。
疑ひもなき我君よ。

判官

「さて其にてあるべきとは何故に仰せ候ふぞ。

子「いや如何に包ませ給ふとも。人にはれる御粧ひ。

疑ひもなき我君よ。

判官詞

地

「父給べなふとて走り寄れば。岩木を結ばぬ義経なれば。泣くく膝に懐き取る。實にや梅檀は。二葉よりこそ匂ふなれ。誠に継信が子なりけりと。よその見る目まで。皆涙をぞ流しける。

ワキ詞
「今は何をか隠し申すべき。我君にて御座候。此上は御座を直され候へ。老尼も近う御参り有つて御目にかゝり申され候へ。

シテ詞
「あら有難や候。我君を拝み参らするにつけて。子

供の事こそ思ひ出でられて候へ。

ワキ
「實にく尤にて候。

シテ
「如何に申し上げ候。継信が八島にての最期の有りさま。剛なりとも申し。又不覚なりとも申す。何れか誠にて候ふやらん承りたく候。

「如何に弁慶。

ワキ
「御前に候。

判官詞

「継信が八島にての最期の様を。委しく語つて老尼

判官詞

に聞かせ候へ。

ワキ

「畏つて候。御諠と申し所望と云ひ。懇に語つて聞かせ申し候ふべし。御前近う御参り候へ。

物語

「さても八島の合戦。今はかうよと見えしに。門脇殿の二男能登の守教経と名乗つて。小船に取り乗り磯まぢかく漕ぎ寄せ。如何に源氏の大将源九郎義経に。矢一筋参らせん受けて見給へと罵る。かう申す名を始めとして。皆御矢面に立たんとせし
が。何とやらん心おくれたりし所に。継信は心まさりし剛の人にて。御馬の前にかけ塞がつて。義経これに在りやとてにつこと笑ひて扣へたり。さて其時に教経は。引き設けたる弓なれば。矢坪を指してひようと放つ。過たず継信が着たりける。鎧の胸板押しつけ上巻。かけずたまらずつゝと射通し。後に扣へ給ふ我君の。御着背長の草摺にはつたと射留む。さて其時に継信は。馬の上にて乗

り直らんとせしかども。大事の手なれば堪へずして。馬より下にどうと落つ。やがて我君御馬を寄せ。継信を陣の後に昇かせ。如何に継信。如何にくくと宣へども。たんだ弱りに弱つて終に空しくなる。なんぼう面白もなき物語にて候。

シテ詞
「さて其時に弟の忠信は候はざりけるか。

ワキ
「あら愚や忠信は。日の下に於て隠れましまさず。能登殿の童菊王丸。継信が首を目懸け渚の方に走り渡るを。忠信引いて放つ矢に。菊王が真中射通されかつぱと転べば。教経舟より飛んでおり。菊王がわだ髪つかんで。遙の船に投げ入れ給へば。程なく舟にて空しくなる。眼前兄の敵をば。弟の忠信こそ取つて候へ。

シテ
「さては敵も大将に。仕へ申し、御童。

ワキ
「継信は又我君の。秘蔵におぼせし御内の人。

シテ
「彼は平家の舟の内。

ワキ 「此方は源氏の陸の陣。

シテ 「彼も主従。

ワキ 「是も主従。

シテ 「思ひは同じ思ひなれば。

ワキ 「よその歎きを思ひ合はせて。御慰みも候へとよ。

シテ 「それは仰せまでもさぶらはず。御身がはりに立ち参らする上は。今世後世の面目なり。さりながら一人なりとも御供申し。御笈をも肩にかけ。此御

座敷にあるならば。

地 「十二人の山伏の。十三人も連なりて。唯今見ると思はゞ。いかゞは嬉しかるべき。

クセ 「其時義経。老尼に語り給ふやう。八島にて継信。

今はかうよと見えし時。思ふ事あらば。委しく言ひ置けと。くれぐれ尋ね問ひしに。継信其時に。息の下より申すやう。弓矢取る身の。御身がはりに立つ事。二世の願ひや三世の。御恩を少し報謝

する。命の軽き身は。露塵何か惜しからん。さ
りながら故郷に。八旬に及ぶ母と。十に余る童部。
是等が事の不便さぞ。少し心にかかる雲の。月に
覆ひて。光も闇くなる如く。其まゝくれくと。
終に空しくなりにけり。

判官
「かやうに郎等を討たせつゝ。

地
「自ら手をくだき。忠勤まこと曇らずは。終に治ま
る世に出でゝ。繼信忠信が。子孫を尋ね出だして。
命の恩を報ぜんと。思ひし事も空しく。我さへか
る姿にて。其名をだにも名乗り得ぬ。憂き身の果
ぞ悲しき。

シテ
「母は思ひに堪へ兼ねて。更くるも知らず有明の。
月の盃取り出だし。御酌にこそ参りけれ。

「實にや心を汲みて知る。人の情の盃を。涙と共に
受けて持つ。

子
「鶴若酌に立ちかはり。別れし父の御前にて。給仕

すると思ひなして。

地「十二人の山伏の。終夜の酌を取り廻り。座敷にも直らで。進み勇める有様を。父に見せばやとぞ思ふ。

地「さる程に。夜もほのぐと明け行けば。く。暇申してさらばとて。はや此宿を立ち出づる。

子「如何に誰かある馬に鞍置き。弓韁まるらせよ。君の御供申さうするに。

シテ「そもそも御供とは何事ぞ。

子詞「君の御供申してこそ。親の敵にも逢ふべけれ。

シテ「それは弓矢の御供なり。是は修行の山伏道に。何の敵のあるべきぞ。

子「さあらば思ひ出だしたり。小さき兜巾篠懸を。とく拵へて給び給へ。山伏道の御供せん。

ワキ詞「弁慶涙を押さへつゝ。如何に申さん鶴若殿。まこと御供有りたくは。今日は道具を拵へ給へ。明日

は迎ひに参るべし。

子「まことざふか。

ワキ「中々に。

ツレ「我も迎ひに参るべし。

ワキ「我も迎ひに参らんと。

地「面々声々にすかされて。いとけなき身の悲しさは。

誠ぞと心得て。少し言葉の弱りたる。をりを得て

客僧は。泣くく宿を出でければ。

シテ「老尼は鶴若を抱き入れ。

地「行くは慰む方もあり。留まるや涙なるらん。く。